

---

# とんぼ

小泉 翔穂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とんぼ

### 【著者名】

小泉 翔穂

### 【Zマーク】

Z0960A

### 【あらすじ】

受験を控えた女の子。少し特殊な悩みかもしけないけど、本当は誰だって感じている不安。こんな不安、感じたことない？

秋は信じられない速さで過ぎ去ってゆく。まるで、背後に迫る冬を恐れるようになってしまった。

夏が過ぎ、やっと秋だと肌に感じると、次の間にはもう北風がスカートをもてあそぶ。

あの年は、時間の速度が奇妙だった。秋は例年よりもずっと早く通り過ぎ、冬が来た。けれど、あの日…あの時だけは、とてもゆっくりと流れていった。それは今でも私の心中に静かに浸透していった。それは今でも私の心に流れ続ける時の支流。

高校は丘の上にあった。新しい住宅街にぽつんと場違いに孤立した学校の周囲には、コンビニもスーパーもなくて、とても不便だった。それでも、その孤立した世界が、私たち生徒に不思議な高揚感と安心感を与えていたことは否定できないだろう。大人の世界から切り離され守られていた。そんな世界で多くの人が三年間を過ごす。その秋は私が、高校三年生の時。

受験生という役割で、同情と期待と心配そうな眼差しで見つめられる特別な一年だ。

学校の裏手、美術室の窓の下には、私たちのお気に入りの場所があった。学校の敷地から一段下がって、コンクリートの壁で小さな崖を補強した場所。

春には桜が、秋には紅葉が。美術室から住宅街を背景に美しく見える。さすが丘の上だと、始めてこの場所を見つけたときは感動したものだった。景色がすばらしかった。

球技大会の空き時間にここへ友達と来て応援をサボった。

監視役のいない自習でも、ここへ来てひたすらにくだらない話で盛り上がった。

振られたときは友達の肩を借りて、ここで泣いた。

振り返ると、たくさん時間を感じたことに気づく。こうやって、コンクリートにもたれ掛けている私がたくさんいたんだ。ふと、鼻の奥がツンとした。

「「めん。遅れた?」

私を上から見下ろして、紅葉と一緒に好きだった彼女の笑顔が振つてきた。

「いやーん、パンツ見えちゃう 椿ちゃん、セクシーー

「おつと。失礼。お眼汚しを・・・」

と言いつつ、スカートの裾を軽く押されて、ジャンプして降りてくる。紅葉が力サッと泣いた。そして椿は私の隣に腰を下ろした。

「何の参考書?」

スカートの上に広げていた本を椿は覗き込んできた。

「英語。ほかの教科やる気しなくてさあ。理系教科こそやらなきやならないけないのに...」

「超一分かる!!!! 苦手な教科やつてると、得意なほうやりたくないよねえ。なんか、勉強やつてると掃除したくなる!! みたいな」言い尽くされた表現だつて、この頃は何度言われても笑えて仕方なかつた。二人分の声と遠くから聞こえる部活の生徒の声が空に高らかに吸い込まれた。

「今日ミスド食べたいんだけどさ、この後付き合つて?」

「いいよ。どうせ塾もないし」

「すごいよね~。塾なしで大学受験出来るつてんだから。マジすごい

い

私は曖昧な返事で返した。椿は隣で生物の問題集を広げて、勉強を始めた。

私たちはしばらく黙り込んで勉強に集中した。でも、私は内容が頭に入つてこなかつた。友達に、誰かに聞いてほしいことがあつたのだ。でも、それを口にすると変な目で見られるのではないかと怖くて言えなかつた。

しかし、どうしても聞いてほしい。吐き出してしまいたい。その

衝動に勝てずに、私は決心した。彼女なら聞いてくれるだろ。

「椿」

私の声は思いがけず小さかった。

「何?」「

「・・・。聞いてるだけでいいからさ、話聞いてくれる?相談とかじゃないんだけど...愚蠢:なんだけど」

「いいよ。話して『らんなさい。仕方ないから聞いてやる』

本に目を落としたままの椿の横顔は、笑ってくれていた。

やっぱり彼女が好きだ。

「昨日も、小学校の時の恩師の所に行ってきた。進路のこととで相談したかったから。話している内に、大体の進路は決まつたんだよ。まあ考えがあんまり変わらなかつたからなんだけど」

紺色のスカートの上には、振ってきた紅葉がキレイな模様を作っていた。その一枚を拾い上げ、それを見つめながらしゃべることにした。

「それでもさ...本当にこれでいいのか!/?っていうのが消えないんだよね。本当にこれでいいの?つて。...椿は先生になるんだよね?」

「うん」

その迷いのなさが私にはたまらなく羨ましいものだった。

私は違つて、サバサバと世を渡つていけそうな椿。大切なものと、そうでないものをすっぱりと切り離してしまつ彼女は憧れだった。

「親が先生だしね、あんた。でね、帰つた後さ、なんか泣けてきちゃつて...」

思い出すだけで、声が震えて、涙が出てきた。隣はびっくりして、私を慰めようと言葉を搜していたが、私はしゃべり続けた。

「『めん、大丈夫。しゃべつていい? それでさ、なんでこんなに不安なんだろ?うつて、こんなに追い詰められてるんだろう?うつて考えたら、怖いんだよ』

小学校、中学校は温室で育てられ、子供に責任なんてない。高校も親や先生が与えた選択しか選んだ安全圏。

でも、これから進む道は違う。

大学の専攻を決めれば、ほぼ将来の職種が決まり選択しが限られてくる。専門性のある職業か、無難に〇〇。前者ならまだいい。後者はありえない。

途中の進路変更は実質不可。

後悔しても、その責任は私にすべて帰つてくるのだ。

「自分がおかしいって分かるんだけどさ、怖くて仕方ない。すべてこの選択で決まっちゃうんだって考えたりさ。責任を負うのがすごく、怖いよ」

本格的に泣けてきて、椿を困らせてしまっていたが、私自身はすつきりしていた。こんなことを親になんて言える訳がない。真面目に話したって、17歳というだけで子ども扱いをして、相談なんか一笑に付される。冗談じゃない。彼らは、それで子供がどれほど傷つくか分かっていないんだから。

椿は私の頭をそっと撫でてくれる。

「本当に文学少女だよねえ」

苦笑気味に言われた。

「泣いてごめん」

「いいけどさ。深く考えすぎだよ、あんたは。責任なんて考えずに、今はやりたいことに向かって進むの！――なんていうかさ……責任って、後悔してときに発生するんじゃないの？だったら、後悔するまでは頑張つてみるの！――ね？話や愚痴ないくらでも聞いてあげるし」

その力強い声に負けて、私はひたすら謝った。泣いたことと、つまらない話をしたこと。

話たいことは話せた。十分だ。

「…」

「…」

ポンつと肩に手を置かれて、顔を見ると、妙に真面目な椿の顔が'affed。

「これから、恥ずかしいことをいうけど、絶対笑わないよ！」

！」

それだけで、私は噴出しそうだった。

「笑うな！ ほら、一匹のとんぼ、見える？ 飛んでるやつ。あれがアタシとアンタ。大丈夫、ちゃんと飛べてるから」たしかに、秋空に高く、一匹の赤とんぼが飛んでいた。トンボって以外と高いところを飛ぶんだなあと気づいた。

「あんたは大丈夫だと思うよ？ ちゃんと勉強しているし、頭いいし。本もたくさん読んでるし。大丈夫だつて。あたしが大丈夫つていうんだから、ほんと！！！ 心配ないって！！」

あまりにも必死で慰めてくれるので、なんだか私は笑い出して、椿は赤くなつて顔を背けた。

今度は笑いすぎて涙が出てきた。お腹が痛い。

「恥ずかしい。椿、恥ずかしい！！！！ 超くさい」

「つるさーい！ 黙れっ！！！ ああもうーほんとに恥ずかしい！ あんなこと言つんじやなかつたあああー！ 恥ずかしいよおー」

両手で顔を隠して椿吠える。それがさらにおかしかつた。

「マジで、笑いすぎ！！！ もう、知らん！！ 一人でミスドに行く」まだ顔の赤い友達は三年間の汚い靴をつかんで、先に崖を上がつて歩き出した。

「ちよつ、待つてつて。生物の八の字教えてほしいんだ」立ち上がりつたスカートから、ヒラリと赤い落ち葉が舞う。紅葉は落ちて、トンボはまだ飛んでいた。

無事に大学生となつた今は、彼女とは時々メールをする程度で、卒業以来会っていない。

でも、秋になるとトンボを見てはあのときを思い出す。

そして、大切な節目、人生の分岐点で、私はあの一匹を思い出す。

きっと今も、飛んでいる。これからも、私たちちはちゃんと飛べて  
る。

そして、私はまた一つ決断を下せる。

きっと椿は忘れているだらうけど、何年後かに会つて打ち明けた  
い。

笑えた彼女の言葉が、今の私にはとても大切だといつことを。  
彼女がいつまでも、大好きな友達だということを。

おわり

## (後書き)

つたない文章力で書き上げました。受験シーズンに便乗して（笑）  
これは実際、小泉が感じていた気持ちなんですが、皆さんはどうで  
しょうか？将来の責任、しかも自分の将来ですから、怖かつたんで  
すよね…

気に入つてもらえば幸いです。では、次回の作品でお目にかかる  
ます様に…（祈）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0960a/>

---

とんぼ

2010年10月17日03時53分発行